**聖徳太子［574 - 622］作の伊予の温泉（道後温泉）の碑文（伊予湯岡碑文）**

　碑の現物は亡失し、文面のみ『釈日本紀』巻十四所引の『伊予風土記』逸文に残っています。

　『釈日本紀』や『万葉集註釈』が引用した「伊予風土記逸文」によると、推古４年（596年＝法興６年）聖徳太子（厩戸皇子）と思われる人物が伊予（現在の愛媛県）の道後温泉に高麗の僧・慧慈（えじ）と葛城臣（かつらぎのおみ）なる人物を伴って赴きました。その際、温泉の妙験に感嘆して、碑文を作ったとのことです。（その「碑」自体は現在失われています。）

**『釈日本紀』が引用した古書「伊予風土記」逸文**

（前書き）

法興六年十月、歳在丙辰、我法王大王与慧慈法師及葛城臣、道遙夷予村正観神井　歎世妙験、欲叙意、聊作碑文一首

法興六年（596年）十月、歳（ほし）丙辰（ひのえたつ）にあり、我が法王大王と慧慈法師（えじほうし）、及び葛城臣（かつらぎのおみ）と、夷予（いよ）の村に遙（あそ）び、正（まさ）しく神の井（い）を観て、世の妙験を歎じたまいき。意（おもい）を叙（の）べんと欲して、聊（いささ）か碑文（いしぶみ）一首を作る。

［この前書きは、後に作られたものとみられる。］

（碑文の本文）

惟夫　**日月照於上　而不私**

**神井出於下　無不給**

万機所以妙応　百姓所以潜扇

若乃**照給無偏私**何異干寿国　随華台而開合

沐神井而瘳疹　詎舛于落花池而化弱

窺望山岳之●（山へんに嚴）崿

反冀子平之能往　椿樹相廕而穹窿

実想五百之張蓋　臨朝啼鳥而戯●（峠の山が口へん）

何暁乱音之聒耳　丹花巻葉而映照

玉菓弥葩以垂井　経過其下　可優遊

豈悟洪灌霄庭意与　才拙実慚七歩　後出君子　幸無蚩咲也

（梅原猛『聖徳太子』から）

うにれ、**はにらして、せず。**

**はにて、せざるし。**

 にし、にかにく。

かの**らししてにすることき**は、

ぞ、、にいてするにならんや。

にしてをすは、ぞ、にちて、をするにならんや。

（この後、略す）

　梅原猛著「聖徳太子」の中の現代語訳から。（梅原氏は福永光司氏の読み下し文に従って現代語訳されています。）
「思うに、日月は上にあって、すべてのものを平等に照らして私事をしない。

神の温泉は下から出でて、誰にも公平に恩恵を与える。

全ての政事（まつりごと）は、このように自然に適応して行われ、

すべての人民は、その自然に従って、ひそかに動いているのである。

かの太陽が、すべてのものを平等に照らして、偏ったところがないのは、

天寿国が蓮の台に従って、開いたり閉じたりするようなものである。

神の温泉に湯浴みして、病をいやすのは、ちょうど極楽浄土の蓮の花の池に落ちて、弱い人間を仏に化するようなものである。

　険しくそそりたった山岳を望み見て、振り返って自分もまた、五山に登って姿をくらましたかの張子平のように、登っていきたいと思う。

　椿の木はおおいかさなって、丸い大空のような形をしている。ちょうど『法華経』にある五百の羅漢が、五百の衣傘をさしているように思われる。

　朝に、鳥がしきりに戯れ鳴いているが、その声は、ただ耳にかまびすしく、一つ一つの声を聞き分けることはできない。赤い椿の花は、葉をまいて太陽の光に美しく照り映え、玉のような椿の実は、花びらをおおって、温泉の中にたれさがっている。この椿の樹の下を通って、ゆったりと遊びたい。

　どうして天の川の天の庭の心を知ることができようか。私の詩才はとぼしくて、魏の曹植のように、七歩歩く間に詩をつくることができないのを恥としている。後に出た学識の人よ、どうかあざわらわないでほしい」（『聖徳太子』梅原猛・著。集英社）